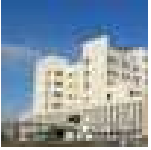


# 国立病院機構における業務の質の向上と働き方改革への取組【渋川医療センター】



- ・独立行政法人(群馬県渋川市)
- ・急性期／慢性期機能
- ・病床数450床(一般病床250床、緩和ケア病床25床、結核病床46床、重症心身障害病床100床、感染症病床4床)
- ・職員数596名(医師64名、看護師339名、医療技術職98名、事務職95名)

## 取組前の状況

- ・ 2040年を見据え、国立病院機構が引き続き地域から必要とされる医療機関であり続けるため、今後の国立病院機構におけるあらゆる取組を貫く理念①「現在及び将来の患者、地域住民が必要とする医療を安定的かつ継続的に提供するNHO」、②「全ての職員にとって安全、安心に働ける職場であるNHO」、③「災害時等の危機管理に強いNHO」を全ての職員と共有し、国立病院機構全体として一体的な組織運営を進める。
- ・ 上記の3つの理念に沿って、1. 医療の質の向上、2. 業務の効率化・生産性の向上、3. 危機管理機能の向上をより具体化し、同時に働き方改革を実現する多様な用途への活用・拡張可能なコミュニケーションインフラを整備し、ICTソリューションの積極的な活用による効率的な業務運営体制を検討することとした。

## 取組内容と成功のポイント

### 【主な取組内容】

国立病院機構全体における取組のモデルケース(実証)として、渋川医療センターにおいて、スマートデバイスを導入し、勤怠管理、音声入力、チャットのアプリケーションを利活用

- ①勤怠管理:スマートデバイスへ出退勤時刻を打刻したり、出入口にBeaconを設置しスマートデバイスの位置情報で出退勤時刻を自動打刻する機能であり、将来的には勤務時間管理簿等との連動も視野に入れている。
- ②音声入力:スマートデバイスに向けて話しかけることにより、音声テキスト変換され、簡単に電子カルテに転送することができる。このことにより、電子カルテへの診療記録等の入力業務を省略化、超過勤務時間の短縮化等が期待でき、医師・看護師等の医療従事者がタスク・シフティングしやすい勤務環境づくりも整備できると考えられる。
- ③チャット:チーム・病棟内メンバーに一斉メッセージを送信することにより、各個人への連絡の省略可能などが期待できる。

### 【3つの視点から実現への取組】

- ①職員個々
  - 職員一人一人が、ソリューションや機能を有効かつ積極的活用することにより、業務の効率化、生産性の向上に取り組むこと。
- ②病院全体
  - ICT利活用環境整備により、最終のタスクシフト先として働き方改革へ取り組むこと。
  - 病院の機能に応じて、業務の効率化や医療の質の向上に向けた創意工夫に取り組むこと。
- ③NHO全体
  - 拡張も含め統一性が確保されたICTにより、NHOネットワークの特性を最大限活かせるよう取り組むこと。
  - 先駆的な取組みとして、NHOが病院における働き方改革をリードすること。

## 取組の効果

- ・ 当該取組は継続中であるが、スマートデバイス使用感のアンケート調査において、勤怠管理については50%、音声入力については24%、チャットについては67%の職員が、とても使いやすい、使いやすいという結果が出た。少数ではあるが、音声入力を使うことで、1日30分以内勤務時間が短縮したという意見もあった。

職員の声  
・今後も工夫によっては使える場面が増えるかなと思いました  
・音声入力について、文節の区切り、文の長さ、記号・句読点入力などに慣れが必要だが、音声認識の正確さや変換効率率は期待以上であり、慣れてくれば有用と思われる など、前向きな意見も多々あり。

- ・ また、国立病院機構ではICTソリューションの積極的な活用手法の1つとしてテレビ会議システムの導入も検討しており、出張しなくても自院に居ながら本部や他病院とテレビ会議や研修への聴講、参加が可能となるようなものである。加えて、スマートデバイス等を活用して、出先からの参加や外部機関との打合せ会議にも利用可能となるよう検討している。